

---

# 魔法少佐アナベル・ガトー

無目藻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少佐アナベル・ガトー

### 【Nコード】

N5500Y

### 【作者名】

無目藻

### 【あらすじ】

アナベル・ガトー。ソロモンの悪夢。

かれは戦死後、不思議なことに高町なのとして再び人生を歩んでいくこととなった！

武人の誉れを尊ぶ少女、高町なのは！彼女が空を駆けるとき、戦士達の叫びが木霊する……。

スーパールトラ不定期更新でいっす

## 第一話 プロローグ（前書き）

注意！Caution！

この二次小説は非常にカオスなものとなっております。

原作陵辱を嫌う方、ロリなガトーを許容できない方、変な文章についてこれない方、ニナ・パープルトンの声とパン工場で働く女性の声と同じだということに驚きを隠せない方、シーマ様とクレシんの風間君が同じ声だと知らなかった方、アクシズ先遣艦隊の方、心臓の弱い方にはお勧めいたしません。

## 第一話 プロローグ

アナベル・ガトーは連邦軍から『ソロモンの悪夢』と恐れられたモビルスーツパイロットである。

そんな彼は宇宙世紀0083年11月13日、星の屑作戦完遂の後、小惑星アクシズへ向かう同志を護るため散った。

散った、と言っても死んだ訳ではない。

いや、確かに肉体的、医学的には間違いなく死んだ。

しかし、彼の不屈の魂は滅びず、時空を越え、ある世界のある街のある少女に入り込んだ。

そして、その少女は後に『海鳴の悪夢』と呼ばれるようになる。

side アリサ・バニングス

「なのは〜！」

私は親友の名を呼んだ。

その親友の名は高町なのは。この私から二つ名を剥ぎ取った張本人だ。

私はちよつと前まで『不死身の第四小队』とか『不死身の釘宮』と呼ばれていた。いや、由来は知らないけど。

でもある日、クラスで傍若無人に振る舞っていた私になのははピントを喰らわせてきた。

『何するのよ!?!』

私は当然怒る。でもね、なのははその後私のことをキツと睨んだんだ。

『情けない!』

そういつたときのあいつの目はまさしく『サムライ』だった。

その後、当然のごとく喧嘩になったんだけど、なんか殴りあって

るうちに友情が芽生えたんだ……って何処の青春ドラマだよ。

そんなことはさておき、私が声をかけるとなのははこちらに顔を向けた。

「おお、アリサか」

「すずかは？」

「じきに出てくるだろう。やつは友との約束を破るような女ではない」

なのはの目はどうみても小学生の目じゃない。数々の戦いを経験した戦士？そんな感じだ。

でも、私ともう一人の親友、すずかは何故かなのはと気が合っただよね。

side out・・・

続く

## 第一話 プロローグ（後書き）

とりあえずプロローグです。次回からなのはことガトーさんメインとなります。

優先的に書かなければならないものがあるのでこれの更新はかなり不定期になると思いますが、どうかよろしくお願いいたします。

## 第二話 魔法の呪文はアナベルなの（前書き）

この形式の書き方ははじめてなので精進していききたいです。

## 第二話 魔法の呪文はアナベルなの

side なのは(ガトー)

私は高町なのは。

実際はアナベル・ガトーというのだが、いつのまにかこうなっていた。

初めは驚いた。私は誇り高きジオン公国軍人だったはずだ。

それが目が覚めるとこのようないけな少女になっていたのだ。・・・ところが、悲しいことに私はそれに慣れてしまった。いや、それはそれで満足している。新しい次元の友人もでき、家族の温かみを知った。

しかし、私は声無き声で叫ぶ。「違う」と。

私は軍人だったからこそ自分を見いだし、大義を持てたのだ！それを今では無くしてしまった！その虚しさ、そして怒りは私を苦しめた。

が、それも今日で終わりとなる。私はこの世界で自分の生きざまを見いだすことができたのだ。

side out

side 淫獣

待て、待て待て。なんだこの『淫獣』って。馬鹿にしてんのか。

・・・まあ、いい。今はそれどころじゃあないんだ。

僕は取り返しのつかない失敗をしてしまった。

ロストロギアのひとつである『ジュエルシード』を取り込んだ生き物をとらえ損ねてしまった。

くそ・・・なんで僕はつかりこんな目に・・・。誰かに手伝ってもらわない限り無理だっつーの。

ハッ！いけない。ユーノ・スクライア、落ち着け。今このような



状況を産み出した老人方に対する罵詈雑言を並べ立てたところで僕は救われないぞ！

でも、手伝ってくれる人が必要なのは確かだ。

「……だれか……この声を……」

僕は必死に訴えた。まだ顔も見ぬ、相棒の存在を信じて……。

「だれか、僕と契約して魔法しようじ……ゲボハアツ！」

side out

sideなのは

「ここからだと近道なんだ」

アリサがそういうのなら事実なのだろう。

私とすずかはアリサの後ろに続いた。辺りは薄暗くなり始めている。

「なのはちゃん……なんか、不気味だね」

「心配ない。ただの木だ」

「なのはちゃん、怖くないの？」

「私は義によつてたつてているからな！」

「意味わからないよ……」

と、ここまで他愛もない会話を交わしていた。

しかしその時、私の頭へ何者かが直接言葉を訴えていた。

「声……?」

どうやらこの声は私にしか聞こえていないらしい。二人は呆けたような顔をしている。

「なのは……?」

アリサが声を掛けてきたが私はそれに答えなかった。

何故ならば私はその時すでに走り始めていたからだ。

二人の呼ぶ声を背中に聞きながら、私は沸き上がる激情に身を委ねていた。

暫く走っていると、一匹の動物の横腹を盛大に蹴ってしまった。

(ゲボハアツ！)

「しまった！」

私は急いでその動物のもとへ駆け寄る。

「これは・・・淫獣か？」

その淫獣は首に赤い宝石をつけていた。

「なのは〜！」

「なのはちやくん」

私に置いていかれていた二人も追い付いた。

「二人とも、見る」

息を半分切らしている二人に先程横腹を蹴ってしまった生き物を見せた。

「あれ？これ淫獣じゃない？」

「本当だあ。捨てられたのかな？横つ腹怪我してるみたい」

まさか「私が蹴りを入れた」なんて言えるはずがない。淫獣処置は二人に任せることとした。

side 淫獣

何なんだよオオオオオオオ！

こいつらなんで普通にフェレットって言わねえんだよ！

あげくのはてには獣医さんにも言われたよ！

「ん〜(；>|<；)これホントに淫獣？それにしても誰かしらね、横つ腹を蹴るなんて酷いことしたのは」

僕を淫獣って表記するのは残酷じゃないのかよ！

それに僕を蹴り飛ばした奴。あつ。目が合ったらアイツ目をそらしたぞ！？

・・・それにしても、このサムライオーラ全開の女の子が僕のパートナーとなる？

なんてこつた。

僕は心のなかで偉大なる聖王女オリヴィエに祈った。

どうか生きて最終回を迎えられますように・・・。

続  
く  
S  
i  
d  
e  
o  
u  
t

### 第三話 ソロモンの悪夢なの（前書き）

結局いつもの文体に戻りつつある今日この頃。

### 第三話 ソロモンの悪夢なの

淫獣ユウノは現在腹に包帯を巻いた状態で動物病院のケージのなかにいる。

「くっそう・・・治癒魔法使ってるのにまだ痛いよ、もう」

そんな感じで文句をブツブツ呟いていると外に気配を感じた。

「!?・・・これは・・・」

少し痛む身体を動かし窓の外が覗ける位置へ移動する。

外には月明かりに照らされたあのジュエルシードのもちやもちや（どう表現してイイかわかんないんだもん）が蠢いていた。

淫獣ユウノはすぐさま数時間前に会ったおっかない少女へ念話を飛ばした。

「聞こえますか・・・貴方の力が必要です・・・」

「なんとっ!?!」

なのはは驚きの声を上げた。

「この声は・・・先の淫獣フェレットか・・・?」

なのは いや、アナベル・ガトーという男は困っている人を無視できない性格なのだ。

なのはは淫獣フェレットの抗議の声を完全に無視して家をこっそりと、迅速に抜け出した。

淫獣ユウノは電柱の陰に隠れながらジュエルシードのアレを観察していた。

そこへ例の少女がやって来る。

「やあ！半分は嘘になるけど待ってたよ！」

「やはり君か。何なのだあの生物は？」

淫獣 ルビつけんのめんどくさくなっちゃった は少女（なんだか“少佐”の方が似合う気がするのは気のせい？よし、今から少佐

だ。( )にジュエルシードについて軽く説明した。

少佐は心得たのか頷く。

「よしわかった。つまり、私とそのジュエルシードの回収を手伝え  
ばいいわけだな？」

淫獣はイエスの返事をして、快く引き受けてくれた少佐に赤い宝  
石を渡した。

「？何だこれは」

「これは“レイジング・ハート”。いわゆる魔法の杖みたいなもの  
さ」

「ふむ、これはアレか？呪文を唱えるのか」

淫獣は予想以上に飲み込みの早い少佐に感激する。

「そう！君は僕の言うことをそのまま繰り返して！」

なのはが言われた通りに呪文を繰り返すと、全身をまばゆいばかりの光が包み込んだ。

「何っ!？」

光に包まれたのもつかの間。一刹那後には光が解け、そこには先  
程までとは違う服を着たなのが立っていた。

基本デザインはなのはが通っている小学校の制服をイメージした  
ものとなっている。どうやら、この服装には本人のイメージが反映  
されるらしい。

しかし、なのはが目をつけたのはそこではない。

なんと、その服のカラーリングパターンが嘗ての自分が使用して  
いた「ゲルググ」のカラーリングそのものだったのである！

「おお！まるで、ジオンの精神が形となったようだ！」

淫獣は頭の上に「？」を浮かべていたが、知ったことではない。

「淫獣君！」

「せめてルビはつけてくれ！で、なに？」

「武器の形状は変えられないのか？」

「ん、レイジング・ハートに聞いてみてくれ。それには人工知能

が搭載されているんだ」

面白い。なのははそう思い、レイジング・ハートに問いかけようとした。すると・・・。

《・・・ガトーよ》

「ハッ!? デラーズ閣下!？」

後ろで淫獣が「あつれえ!? こんな声だっけ!？」と戸惑いの声をあげている。それをやはり無視してなのはは丁寧に問いかけた。

「デラーズ閣下、貴方の形状は変えることができるのでしょうか?」

《できる。貴公は、儂がそのようなことも出来ぬ老人だと思つか?》

「いえ! 滅相もございません、閣下」

なのははがそう言うとデラーズ・ハート(勝手に命名)はなのはの要求した形、ゲルググ用のビームライフルへと変形した。

《行け、ガトーよ!》

デラーズ・ハートの激励の言葉で久々に戦士の魂を奮い立たせたなのは アナベル・ガトーはジュエルシードのアレの前へと飛び出した。

淫獣<sup>ユウシ</sup>には何が起きたか理解できなかった。ただ、言えることはその少女 高町なのははとんでもなく強く、とんでもなく“漢”だと言うことだ。

なのははジュエルシードのアレの前へ飛び出した後、十数メートルの高さへ跳ねた。

「南無三!」

なのはがビームライフルの引き金を引く。銃口から放たれた魔力粒子の塊は見事にジュエルシードのアレの肉体を抉った。

「グオアアアア!」

ジュエルシ(以下略)は一応痛覚らしいものはあるようで、痛みによる咆哮を上げた後その変態的触手を数本なのはに放った。

「遅おい!」

しかし、9歳とはいえ伊達にソロモンの悪夢ではなく、嘗ての勘

を取り戻した彼女はそれらを全て避けきった。

落下に身を任せながら正確にビームライフルを連射する。

ビビユウン！バビユウン！

「アアアアアアアア・・・！」

ジュエ（以下略）はビームに串刺しにされた挙げ句、断末魔の叫びを冷たい夜の空気に残して消滅した。

「す、すごい……」

「この蒼い宝石を封印するのだな？」

なのはの見た目に似合わない華麗な戦いぶりに声もでなかった淫獣だがなのはに問いかけられてハツとした。

「う、うん！そうだよ」

「そうか。では、閣下、お願い致します」

《ウム》

なのははデラーズ・ハート扮するビームライフルの銃口をジュエルシード（本体）へと向けた。

「ジュエルシード、封印！」

なのはがそう唱えるとジュエルシードは蒼い光となってビームライフルの銃口へと吸い込まれていった。非常にシユールである。

《ガトー、見事であった》

「ありがとうございます、閣下」

その後、遠くからパトカーによるサイレンの音が聞こえてきたため、ズツタズタになった道路や誰かの家の塀を残して一人と一匹と一機はその場から逃走した。

続く……



### 第三話 ソロモンの悪夢なの（後書き）

#### 次回予告

なのはは学校で友達のアリサ、すずか、はやてに淫獣について問い詰められ、ついには淫獣の正体を吐いてしまう。

それを立ち聞きしていた担任の先生は悪魔の計画を実行に移すのだった……。

次回、「光る宇宙」君は、鴉の涙を見る

caution!これはほぼ嘘予告です。正確な部分は二行目21字目までだけです。

## 第四話 淫獣との同居生活が始まるの

私立聖祥大附属小学校。そこが高町なのはの通う学校である。

「おはよう！」

なのは今朝も漢気溢れる挨拶を教室内に響かせた。

「おはよう、なのは」「なのはちゃん、おはよう」「おはよう、少佐」

その挨拶に友人の三人が返事をくれた。

一人はアリサ・バニングス。通称『釘宮小隊』。もう一人は月村すずか。物静かだが、言うときは言う地味に頼れる少女。もう一人は八神はやて。関西弁が特徴の車椅子少女。因みに彼女は何故かなのはを少佐と呼ぶ。なのははそれをとつても気に入っている。

「少佐、昨日淫獣フェレットひろたんやて？」

予想通り、その事について聞かれた。はやては昨日は病院に行っていたため、帰りは一緒ではなかったのだ。

「ああ、確かに淫獣を拾った。動物病院送りだったがな」

「ね、ね、なのはちゃん、あの後、淫獣の様子見に行ったりした？  
なのははずすかの質問にドキリとした。

まさか、見られていたのか！？」

が、どうやらそれは杞憂だったようで、彼女は純粹に淫獣のことが気になっているだけのようだ。

「ま、まあ、そうだ・・・」

まさか「その淫獣から魔法の力を授けられて変な生き物とドンパチやりました」と言うわけにもいかない。

と、言うわけでそこは事実を織り混ぜた嘘で誤魔化した。

「よかつたじゃん！」

基本的に疑り深いアリサも信じてくれたようだ。

「しかし、問題は家に帰ってからだだった・・・」

先のは基本嘘だったが、これから話すことは事実である。

~~~~~

なのはが家に帰ったのは結局十一時ちよい前であった。

このまま堂々と玄関から帰宅したらお父さんのお仕置きデストロイヤーを食らうこと必須だったため、屋根を上って二階の窓から屋内へ入ることにした。

なのはは気配を消して玄関前を横切ろうとした。その時！

「・・・何をしている」

なのはは急速に身体を捻り、身を構えた。伊達に前世は軍人ではない。

しかし、そこにいたのは別に不審者でも何でもないなのはの実兄、高町恭也であった。

彼の手には何やらスイッチ的なものが握られている。

「どこに行っていた。言わないとお前を殺す」

実は高町恭也は去年の暮れに近所の暴走三輪車に轢かれてそれ以来「非異炉病<sup>ヒイロ</sup>」という未知の病に侵されているのだ。この非異炉病、怒ったりすると自分には自爆装置が組み込まれていると思いついてしまふ世にも恐ろしい病気なのだ。

「お前を・・・・・・・・・殺す」

「なにしてんの〜？」

そこへ姉の美由紀が襲来する。

「あっ！なのは〜！お父さん心配しすぎて鼻からコーラ飲んでたよ〜！」

鼻からコーラを！？これは一大事である。美由紀姉もどうやら立腹のようだ。

しょうがない、と、漢なのはは覚悟を決める。

「ねーねー、お姉ちゃん、この淫獣家<sup>フェレット</sup>においてあげていいでしょー？」

今だけ赦される禁断の奥義、だっ子、である。

この奥義は自分に降りかかる災難を回避する代わりに精神的ダメージを受けるといふ諸刃の刃である。

(く、屈辱・・・！)

が、どうやらこの奥義は功を成したらしい。

「あら！可愛い淫獣ねー」

美由紀姉は可愛いものに弱いのだ。

「もう、しょうがないわねー。父さんと母さんには私から言っとくわよ」

なのは心のなかで歓喜の声をあげる。

「お前を・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・殺す」

「兄さん黙ろつか。潰すよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

~~~~~

「えっ？じゃあ拾った淫獣は少佐ん家で飼うことになったんか！？」

「まあ、そういうことだな」

アリサとすずかもオオー、と驚きの声をあげている。

「それにしても淫獣飼うの、おばさんはともかく、おじさんが許すなんて意外ね」

それに関しては簡単である。

一応のところ父、士郎が大黒柱として家計を支え、家族を守っているわけだが、時折その力を母桃子が凌駕するのだ。

その時は士郎が鼻からコーラを飲むという暴挙に出ていたため、まさしくスーパー桃子タイムだったと言えるよう。

「スーパー桃子タイムの間は母が白と言えば黒でも白になるのだ」

「なのはの家族ってすごいね・・・」

アリサがなんとも言えない顔でそう評価した。

~~~~~

その週の休日、アリサ、すずか、はやては高町なのはの住みかである喫茶店「翠屋」に集まっていた。目的はもちろん、高町家の扶養家族となった淫獣フェレットを見ることである。

「これが例の淫獣フェレットの淫獣だ」

ユーノはなんとも言えない顔をしていた。

彼はなのはと同年代の少年だ。こんな美少女達にもみくちやにされるなどもつと喜んでイイはずだ。第一、この世界に淫獣じゃない男なんているかい？

それでもユーノの顔は晴れなかった。その原因は彼をいじりまくる少女達である。

「淫獣君カワイー！」 「淫獣くーん！」 「淫獣の淫獣かあ。エエ名前やなあ」

やっぱりお前らもかよ。僕を淫獣と呼ぶのかよ。

いや、わかってるよ？ 「淫獣」と書いて「フェレット」もしくは「ユーノ」と呼ぶことぐらい。わかってるさ。でも、やっぱり凹むよ。

何だよ、「淫獣の淫獣かあ」って。意味わかんねーよ。淫獣の二乗かよ。これに位はルビつけるよ作者アアア！

そんなこと思いつつも今の状況を満喫している淫獣君。

次回からはユーノと表示してやろうと決意する作者であった。

続く

**第四話 淫獣との同居生活が始まるの（後書き）**

次回、早くもあのパツキンさんが登場！

合言葉は

「ニンジン、いらないよぉ・・・わぁー」

感想、ご意見、お待ちしております。

第五話 ジュエルシード強奪なの(前書き)

べつに強奪する訳じゃ無いけどね。

## 第五話 ジュエルシード強奪なの

ユーノは夢を見ていた。

ユーノ。

「ハッ！その神秘的なオツドアイ！聖王女オリヴィエ殿下！てか、文章のなかで僕が普通に名前と呼ばれている！」

そうよ。貴方は今回からたまにしか淫獣呼ばわりされないのよ。「たまには言われるのかよ。それにしても、それはまた何故……？」

この小説の感想でこの淫獣というフレーズはたまに使ってから面白が増すのでは、という意見が書き込まれていてね、作者が「確かに」と思ったわけなのよ。

「なんとというメタ発言」

それにいちいちルビつけたりするのもしんどいしね。

「これはまたとんでもないメタ発言だ！」

因みにこの件は問題があったりしたら自動的に消されるわよ。ほら、起きなさいユーノ。なのはちゃんと呼んでるわよ……。

『ユーノ、ほら、起きろ』

なのははバスのなかで念話によってユーノを夢の園から引きずり出そうとしていた。

『んん、なのは……』

『もうすぐ目的地だ』

見た目は美少女、中身はアナベルな彼女は友人の月村すずか宅にお茶のお誘いを受けているのだ。今はその移動中である。

「なのは、やっぱりお茶のお誘いは嬉しいか？」

今回のお出掛けはなのはとユーノだけでなく、兄の恭也も一緒だ。恭也とすずかの姉、忍はとってもイイ仲なのである。



「私の心は今の海鳴のように震えている」

「ハハハ。そいつはよかった」

なのはの中身、つまり、アナベル・ガトーはお茶会なぞ興味のひとつもわかないのだが、女の子という肉体に刻み込まれた女の子の部分があるようなお洒落なものを求めているのだ。

『何故少女はこのようなことをやりたがるのだろうか』

なのはは何時もそう思っていた。

月村邸は豪邸である。すずかは町の喫茶店の娘とは歴然とした差があるお嬢様だ。

その庭園の一角にあるテーブルになのはを含め四人少女が座っていた。

ユーノは彼女等の足下で猫と遊んでいる・・・ように見える。

「あゝあゝ、すずかちゃんは猫、アリサちゃんは犬、んで少佐はフエレットかあ。エエなあ。動物」

はやては両親に先立たれ独り暮らしなため非常に孤独だ。しかも体が不自由なため、その代償行為として動物の存在を欲していた。

しかし、作者は言う。心配するな。じきに四人のお母さんとなる。四人はしばらくペット談義で盛り上がったが、なのはにそれを中座せざるを得ない状況が発生する。

《ガトーよ》

デラーズ・ハートからの呼び掛けになのはは応じる。

『どうされましたか？』

《近くにジュエルシードの反応がある》

『なんと!?!』

なのははハッとユーノを見た。彼も気づいているらしく、少し頷くとユーノは猛スピードで駆け出した。

「あれ?ユーノどうしたの?」

「あっ、ユーノは散歩にいきたいそうだ。御免!」

なのははユーノを追って駆け出した。

近くの森の中、一人の金髪少女が木の上に腰かけていた。

『フェイト、一人で大丈夫？』

彼女の脳内には優しい相棒の声が響いている。

「大丈夫だよ、アルフ」

フェイトと呼ばれた少女は自らの手にあるデバイスを見つめた。

「それよりもアルフ、バルディッシュの新しい身体はスゴいよ。前のやつと比べるとパワーも桁違いだし、エネルギー伝達システムも5%速度が上がってる！変形機構もシンプルかつ多彩になって他にも」

『はいはい！分かったからジュエルシード早いと回収しちゃおう』

フェイトはうん、と返事をしてデバイスを起動させた。

そのころ、なのはとユーノは驚きの光景を目の当たりにしていた。かつてはソロモンの悪夢と恐れられた前世を持つ彼女も驚きを隠せないことはある。

二人の前には超がつくほどでっかい猫がいたのだ。

「ユーノよ。あの猫は何故あんなにでかいのだ！？」

「きつとあの猫が『BIGになりてえ』と願ったんだろっねえ」

理由がわかったところでははデラーズ・ハートを起動する。

「ジーク・ジオン！」

そう唱えると、彼女は一瞬の後、ガトール専用ゲルググのカラーリングのバリアジャケットにビームライフルという出で立ちとなった。なのはは木の影からビームライフルの照準をBIG猫に合わせ、引き金を引く。

銃口から伸びた数本のビームはBIG猫の身体の様々な場所に当たり、見た目に似合わず可愛らしい声をたてながらBIG猫は昏倒した。

「ふん、鎧袖一触とはこの事か・・・」

猫はジュエルシードと分裂し、起き上がったかと思うと猛スピードで逃げていった。

ビームライフルの銃口をジュエルシードに向ける。

「このジュエルシードはいただいて行く！」

《封印》

ジュエルシードは蒼い光となってデラース・ハートに吸い込まれていった。

「これで、よし・・・ッ!？」

安堵の吐息を漏らそうとした瞬間、なのはは近くに気配を感じた。気配の根源はなのはの近くの木の上からだ。

「・・・何者だ!？」

金髪の少女はなのはの十数メートル先に降り立った。

「貴方にジュエルシードを渡すわけにはいかない！」

金髪少女　フェイト・テスタロッサはサイスマードのバルディッシュを構えた。

「ふむ、意気込みはよし。だが、相手が子供ではな

「お前も子供だろ!？」、とユーノは近くの茂みでそう思ったが、口には出さなかった。何故か出さずにはいけない気がする。

「であっ!」

フェイトは小さな気合いの声ともなのはに切りかかった。彼女の攻撃は速く、正確であった。しかし、なのはにそれをかわされる。

「!？」

どこへ行った? 戦闘中に敵を見失うのはあつてはならないことであるが、フェイトはそれをおかしてしまった。

首を素早く巡らしていると背中を強烈な衝撃が襲う。

「かはっ・・・」

なのはのシオルダータックルは結構効いたようで、軽く数メートル吹き飛んだフェイトは地面に叩きつけられた。

「く、く・・・」

背中をこらえながらフェイトは立ち上がる。が、しかし。

「！」

彼女が顔をあげたとき、喉元になのはのビームナギナタの切っ先が立てられた。

「私と闘うには君はまだ、未熟・・・！」

なのははそう言っているとビームナギナタを納め、空へ飛び上がった。

「未熟だとお！」

森の中にフェイトの悔しさによる叫びが木霊した。

この闘いはなのはとフェイト、初めての邂逅として二人の記憶に深く刻み込まれることとなる。

因みにユーノ君はなのはが飛んだため、少し走るはめになりましたとさ。

## 第五話 ジュエルシード強奪なの（後書き）

先頭シーンをもっとうまくかけるようになりたい。

しかもラストなんかフェイトさんが主役っぽいし。まあ、主役であることに間違いはないのだけれども。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5500y/>

---

魔法少佐アナベル・ガトー

2011年11月22日01時19分発行